



## 継承されるミーナーの精神

2020年11月2日から6日まで帯広市役所ロビーで、拙書『ペンとミシンとヴァイオリン—アフガン難民の抵抗と民主化への道』の発刊記念写真展が開催された。会場で展示された写真をみているときに微笑むミーナーの顔が目に入った。その瞬間、RAWA(アフガニスタン女性革命協会)の思想や歩みの一端をこうして一つの形としてあらわすことができたことに小さな喜びを感じた。

ミーナーは、1977年に創設されたアフガニスタン初のフェミニスト団体RAWAの創設者である。RAWAは、平和で民主的な国家を築くために、女性の団結の力で社会を抜本的に変革することをめざして活動してきた。わたしが撮影したのは生身のミーナーではない。彼女はわたしが高校に入学した1987年、パキスタンのクエッタでKGB(ソ連国家保安委員会)の支配下にあったアフガン諜報機関KHADの関係者らにより暗殺された。わたしがカメラを向けたのは、RAWAがかつてラーワルピンディー(パキスタン)で運営していたヘワド高校(小学校から高校までの12年教育。2016年3月閉鎖)の壁に貼られていたミーナーの顔写真とRAWAのロゴである。

わたしは2012年4月から2015年9月まで毎年ヘワド高校を訪問していた。「RAWAと連帯する会」がオーストラリアの民間団体とともにこの学校の財政支援をしていたためである。現地を訪問し、施設や備品に不備がないかどうか、在学生の様子、教職員の目からみた運営状況、学生の将来の計画や希望、アフガニスタンへの帰還状況等を直接確認することを心掛けていた。もちろん、RAWAメンバー(パキスタン在住メンバーとアフガニスタンからパキスタンまで来てくれるメンバーの双方)からリアルなアフガン情勢を聞き取ることも現地訪問の大きな目的であった。

ヘワド高校で何度ミーナーの写真を目にしたことだろう。そのたびにわたしは「ミーナーの肉体は死しても、精神はけっして死なず。だからこそヘワド高校がここにある」と言い聞かせていた。創設者の命を奪われようとも、またそのラディカルな思想ゆえに常に弾圧のおそれと隣り合わせにしようとも、残されたRAWAメンバーはあきらめずに社会変革を追求してきた。めざす社会像に共鳴した新しい世代が活動を継いできた。〈知〉の獲得は、家父長的な社会規

『ペンとミシンとヴァイオリン—アフガン難民の抵抗と民主化への道』(寿郎社)



範からの解放、大国の占領や支配からの解放、そしてアフガン社会で対立する諸軍閥やイスラーム諸勢力の覇権争いからの解放の意義を導く重要な手段の一つである。そうであるからこそ、RAWAはその活動において教育、とりわけ女性教育に力を注いできた。

「RAWAだったら子どものために学校をつくってくれるかもしれない」そう考えたウォロス・ダラ地区(パキスタンとの国境沿いにあるナンガルハール州の州都ジャラーラバード郊外)の住民が2017年にRAWAに連絡をとったことをきっかけに、RAWAの新たな学校建設・開校に向けた動きが始まった。住民の多くは、かつてRAWAが運営に深くかかわっていた民主的なヘワ難民キャンプ(パキスタン)からの帰還難民である。住民は、難民生活を通して子どもの教育の重要性とRAWAの方針を理解していたからこそ、信頼するRAWAに相談したのである。とはいえ、RAWAには学校を新たに建築するだけの財政的余裕がないために、RAWAと連帯する会がその建設費用を文字通り必死にかき集め、徐々に建設が進められていった。その結果、2018年9月にビビ・アイシャ学校の正式な開校式が挙行されたのである。

こうしてミーナーやその同志たち、あとに続いた者たちの精神が反映されたさらなる試みが始まった。そのほんの一端にかかわりを持つことに「重圧」を覚えながらも、RAWAとのつながりを一層確かなものにするための歩みを進めていきたいと考えている。

(室蘭工業大学大学院准教授／日民協理事  
清未愛砂)

### 次号予告

「法と民主主義」2020年12月号

緊急特集●

日本学術会議会員の任命拒否を許さない(仮題)

例年12月号は、司法制度研究集会の特集ですが、急遽予定を変更し、日本学術会議会員任命拒否問題の特集を組むことにいたしました。また、例月より早い時期の発刊を目指して準備を進めております。ご期待ください。